

# 日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



## 反乱・撤収

ロシア南部ロストフナドヌーで、南部軍管区司令部からの撤退を準備する民間軍事会社ワグネルの戦闘員=6月24日、AFP=時事

開かれなかった記者会見  
突き付けられた重い問い

会場に300人以上詰めかけた日本記者クラブの記者会見が、2018年度には四つもあった。当時はテレビで見ると身だったが、その中でも危険なタックルが問題になった日大アメフト選手の記者会見は強く印象に残っている。未成年の、いわば加害者が記者会見に臨むという前例のない申し入れを、クラブは正面から受け止め、開催を即断した。一方の当事者のみの主張を取り上げられることを避ける傾向に、風穴を開けたともいえるかもしれない。

話をいまに移し、開かれなかった記者会見のことを書かなければならない。ジャーナリス事務所の創業者の性加害を訴える記者会見は、日本記者クラブに持ち込まれることはなかった。それどころか、日本外国特派員協会が開かれるまで、開催を呼びかけることに思い至ることも、私はなかった。

その後、企画委員会での提案から、この問題についてのシリーズ記者会見を6月に4本組んだ。報道の現場からの報告も今号に掲載されている。日本のメディアの多くは、自らを問いなおすことを強いられている。日本のメディアがつくる日本記者クラブもまた、来し方を自ら問うことを余儀なくされた。考えなくてはならないのは「もし」ということだ。

もし、日本記者クラブに最初、記者会見が持ち掛けられていたら、危険なタックルの時のようにきちんと受け止められたか、どうか。年間170以上の記者会見を開いていて、いままさら気づかされる。その判断の難しさに。

(専務理事 江木慎吾)

私が会った  
あの人の

## 斎藤勤さん 元内閣官房副長官 「永田町」に向かない政治家

五十嵐 泰（共同通信社）

大相撲千秋楽の表彰式で、大きく重さも40キ以上ある「内閣総理大臣杯」を一人で持ち上げ、国技館内を沸かせた。大柄だが眼差しは優しい。「気は優しく力持ち」を地でいくのが、30年以上取材をしてきた斎藤勤元内閣官房副長官だ。資質、実力は十分だったが、「永田町」には向いていない。そう感じる政治家だ。

気さくな人柄で誰にでも会い、話せば好かれ、信頼される。発想や政治姿勢は柔軟で、調整力は高く評価されてきた。ただ、国会議員の多くが重要視する「損得勘定」を好まなかった。

社会党の横浜市議として安定し、将来を嘱望されていた1995年、党の退潮ムードが隠せず、当選が見通せないため候補者を見つけれなかった党に要請され、参院神奈川選挙区に出馬した。

この時は最下位で何とか当選、



（斎藤勤氏提供）

### 議員辞職し小泉首相に挑戦

11区に有力候補をと依頼されて探したが見つけれず、「小泉政権の安全保障政策は許しがたい。誰もいないのなら自分が出ようと決めた」。後に、そう明かされた。

「あなたは民主党参院の中心にな

る人だ。将来は副議長にもなれる」。参院関係者はそう言っで一斉に反対、党幹部も「出馬は頼んでいない。本当にいいのか？」と何度も確認したが気持ちを変わらなかった。こうしたケースならば検討される比例代表での救済措置も「全く考えなかつた」という。

結果は惨敗、議員の職を失う。07年参院選には初めて比例代表で出馬したが、ここでも特別扱いは求めず、落選した。

09年の衆院選には、南関東ブロック比例下位で出馬した。事実上の人数合わせだったが、政権交代の勢いで当選した。党内には閣僚など重要ポストにとの声もあったが、要請された国対委員長代理、内閣官房副長官といった、要職だが黒子役でもあるポストで奔走した。

「議員としての活動に専念する」として、勧められた再選のための活動も一切していない。12年衆院選は、これまた党の要請で全く縁のない山梨1区から出馬し落選、政界から身を引いた。

### 平和にこだわり、政治塾設立

政界引退後は、名誉職や企業の顧

問などに就くケースが多いが、それもしていない。働きながら高校、大学に通っただけに、若者の教育には人一倍関心が強く、設立した政治塾「勤草塾」の運営を16年から本格化させた。母校神奈川大学の副理事長が、引き受けている数少ないポストの一つだ。

市議当時から「平和」と「地方分権」にこだわり、米軍基地問題にも熱心に取り組んできた。沖縄県にも頻繁に足を運んでいたが、長く親交のある玉城デニー知事の要請を受けて4月、沖縄県政策参与に就任した。今後は月に数回は沖縄に通うという。

「日本の政治、経済は危機的な状況だ。党がどうこうではない。日本を救い、再生する政治勢力づくりにも取り組みたい」。永田町には向かないが、こんな政治家が少しでも増えてほしい。そう感じる斎藤氏の活動は、これからも続く。

（いがらしやすし 1986年入社  
政治部副部長 特別報道室長 編集局企画委員などを経て 現在 予定チーム長）

次号は鈴木達也さん（神奈川新聞社）にバトンが渡ります。